サクラエビ資源
再生のための
科学的政策提言

2021年2月

サクラエビ再生のための専門家による研究会

なぜいま「提言」を発するのか

国内では静岡でしか水揚げされていないサクラエビは「駿河湾の宝石」とも呼ばれる貴重な自然の恵みであり、静岡県民共有の「財産」です。しかし、近年の深刻な不漁により高級食材として珍重される一方、県民の食卓に上がらない日々が続いています。また、漁業者や加工業者、関連小売業者の経営、さらには地域経済にも深刻な影響を与えています。

現在の駿河湾サクラエビ漁の資源管理は静岡県の指導の下、漁業者による自主的資源管理に基本的に委ねられています。しかし、これでは科学的な裏付けが薄く、資源減少と漁業衰退を引き起こ

す根源的な原因となっています。

私たち科学者10人はこのような深刻な事態に鑑み、海洋や資源管理に関する専門的知識を持つ者の社会的責任を果たすため、2020年1月に「サクラエビ再生のための専門家による研究会」を発足させ、計5回の全体会合に加え、最新の解析結果を持ち寄り日常的に活発な議論を展開してきました。

欧米諸国では水産資源の持続的利用のためには「科学的根拠に基づく公的規制」が重視されている現状があり、20年12月施行の改正漁業法ではこうした精神が一部不充分ながら盛り込まれたと認識しています。

18年秋漁から静岡県桜えび漁業組合は「自主規制」を続けてきましたが、いまだ資源回復の目途が立たない現状を鑑みて、研究会としてこれまでの資料やデータ解析と研究成果に基づく科学的議論を踏まえた提言を発出することが重要と考えました。この提言書は1年に及ぶ10人の研究者の議論の総意に基づいています。

提言

2021年春漁に向け
早急に対応する課題①

～ 漁業者の皆さんへ ～

① 21年春漁でも漁獲量を十分に制限し、親エビ（1歳エビ）を残す。浮遊幼生の餌となる植物プランクトンが十分にあり、海

況が幼生の成長に適した５～７月に駿河湾奥で大型の卵がたくさん産まれることを一番に心掛ける。

② 21年春漁の漁獲上限は仮に資源回復が見られた場合でも200㌧に抑制する。それ以降は順応性を持たせながら対処していく。
※18～20年の春漁と秋漁の漁獲量の平均値をベースにして求めた相対資源量を基に、漁獲率（F）＝0.1として求めた漁獲量の幅内でその最大値200㌧を採り上げた。

③ 駿河湾奥（北緯35度以北の海域）での操業を抑制する。

④ 幼生の出現数の変動と植物プランクトンの発生量の変動の「マッチ・ミスマッチ」を研究者と共同で確認する。

提言

2021年春漁に向け早急に対応する課題②

～ 行政・研究機関の皆さんへ ～

① 科学的調査に基づき生物学的許容漁獲量（ABC）を算定し、それを基に漁獲可能量（TAC）を設定するための十分な調査体制を構築する。

② サクラエビ不漁問題解決のため静岡県、関係市町、漁業者、大学関係者、そのほかの識者・専門家などからなる、より専門的

でかつ一般にも開かれた「協議会」を設置し、具体的な対策の実施に当たる。

提言
サクラエビ資源再生のための長期的課題①

～ 漁業者の皆さんへ ～

① 魚網の小型化や減船などを県と協議し、資源量に合わせた漁獲努力量の軽減を図る。

② 秋漁での漁獲対象は産卵ピークを終えた親エビ（1歳エビ）に限る。このためには秋漁を９～11月に前倒しする。

③ 地元漁協など漁業者組織として独自に資源量や群れの分布、海況を調査するため、組織内に調査部門を創設する。

④ 静岡県や大学などと連携し、漁業者組織内に科学的資源管理が可能な人材育成のためのプログラムをつくる。

提言

サクラエビ資源再生のための長期的課題②

～ 行政・研究機関の皆さんへ ～

【漁業方面の課題】

科学的調査に基づき生物学的許容漁獲量（ABC）を算定し、それを基に漁獲可能量（TAC）を設定するための十分な調査体制を構築する。

【主に物理方面の課題】

① 駿河湾内の海況（河川流出水の拡散過程、湾外からの黒潮系水の流入過程、潮流、季節風の影響など）の実態解明を行う。

② 海流とサクラエビの生態（幼生の湾内滞留・流出、エビのパッチ＝高密度集団の特性、流れに対する耐性など）の関係を解明する。

③ 温暖化により、湾奥に発達する夏季の水温躍層はさらに強化する恐れがある。水温躍層の発達がサクラエビに与える影響を調査する。

【富士川水系の濁り】

富士川水系から大量に流入する濁り（無機粒子および有害有機物など）が湾奥の産卵場に滞留し、幼生の成長阻害要因となっている可能性などについて調査する。

【主に生物学方面の課題】

① 長年の春漁での取り過ぎが原因で産卵時期のピークが大幅に後

ずれし、主産卵場所が移動し、幼生の出現と餌の植物プランクトンの大発生（ブルーミング）の時期とがミスマッチを起こしている可能性を明らかにする。

② 栄養状態や漁獲重量に関与する「肥満度」を測定する。

③ 捕食動物による「捕食圧」について調べる。

【海洋観測・基礎研究方面の課題】

① 駿河湾の環境変動（水温変化、植物プランクトン量の変化、栄養塩などの化学成分など）に関する基礎的研究を実施継続する。併せて地球規模の大気・海洋環境や海洋生態系変動との関係を調べる。

② 大学などの学術組織・漁業者と協力して調査船の運行やデータ交換などを含む調査協力体制を一層強化する。

【そのほかの課題】

漁業者や県民の啓発活動（セミナーなど）を地元メディアと連携して推進する。

提言
サクラエビ資源再生のための長期的課題③

～ 静岡県民の皆さんへ ～

①「駿河湾の宝石」であるサクラエビは静岡県民に平等に与えられた自然の恵みであり財産である。豊かな水産資源の維持保全について公開講座や報道を通じてより関心を持ってほしい。

② 大学や行政が主催する水産資源の持続性や地域環境に関するセミナーに積極的に参加してほしい。

研究会メンバー（順不同）

・荒功一日本大教授（プランクトン学）

・荒川久幸東京海洋大教授（海洋光環境学）

・大森信東京海洋大名誉教授（生物海洋学）

・カサレト・ベアトリス静岡大特任教授（海洋生物学）

・鈴木款静岡大特任教授（海洋生物地球化学）※座長

・杉本隆成東京大名誉教授（水産海洋学）

・千賀康弘東海大名誉教授（海洋分光計測）

・田中潔東京大准教授（海洋物理学）

・中村保昭上海海洋大教授（水産海洋学）

・美山透海洋研究開発機構主任研究員（海洋物理学）